

セネカ『自然研究』第6巻の地震原因論部分に おける地下の描写について

——地下世界に慣れる——¹⁾

山口 京一郎

はじめに

セネカ『自然研究』第6巻は地震について述べる巻であり、後62年2月5日に発生したと考えられるカンパニア地震²⁾を受け、現実の震災により脅える人々の恐怖を取り除こうとする説得と地震の原因についての理論を扱うものである。気象論の諸現象を扱う『自然研究』の他の多くの巻と同様に、道徳哲学的提言と自然学的考察が共に行われる。第6巻の大きな特徴は、現実の震災を受け、発災後短期間のうちに³⁾、実際の地震被害を意識して記されている点であり、その道徳哲学的提言は被災者へ向けたメッセージという側面も持ちうる。これは『自然研究』の他の巻と比べても、地震に言及する古典古代の他の著作と比べても、稀有な点である⁴⁾。したがって

-
- 1) 本稿は日本ピューリタニズム学会定例研究会（2021年4月10日）での報告「セネカ『自然研究』6巻に見る地震災害に対する古代自然学のアプローチ」の一部を加筆修正したものである。
 - 2) カンパニア地震の発生年についての議論はcf. Hine (1984); Williams (2006), p.125, n.3。
 - 3) 『自然研究』全体の執筆年代の上限が少なくとも64年のローマの大火以前と思われ（土屋（2006）「解説」、p.427）、また第6巻ではカンパニア地震を nunc（1章12節および12章2節、Hine (1984), p.267）と形容している。
 - 4) なお、『自然研究』の他の巻でも現象の実例の報告は少なからず盛り込まれている。ただしそれらは（第6巻で過去に発生した他の地震の事例が引かれるのと同程度の扱い方での）事例紹介的な記述に留まっており、第6巻でカンパニア地震についてなされるような、現象に関わる人々への応答を主眼とするものではない。地震を扱う古典古代の他の著作には地震の事例を添えて考察を述べるもの（アリストテレス『気象論』の地震部分365af. など）や、同時代の地震災害の比較的詳細な報告を述べるもの（トゥキユディデス『歴史』3.89な

地震現象と社会との関わりを考えると、第6巻全体を、道徳哲学的提言と自然学的考察とを併せて行う統一的な巻として読むことが求められる。『自然研究』第6巻における地震現象の原因についての諸理論そのもの言うまでもなく現代地震学の現象理解からは（部分的には強引な類似性の指摘が不可能ではないとしても）大きく隔たりのあるものではある。だが、むしろその隔たりをふまえてこそ、自然学的記述を通しての恐怖の取り除きという手法からは現代においてもなお見るべき普遍性を汲み出せる可能性がある。地震に恐怖する人々へのセネカの応答方法の分析は、セネカや古代自然学への理解を深めるに資するに留まらず、災害と社会と科学⁵⁾の関りへの現代的な視点にも有益なものであるはずである⁶⁾。

『自然研究』第6巻はその内容から道徳哲学的提言部分（1-3章および32章）と地震原因論＝自然学的考察部分（4-31章）に大きく分けることができる。ただし道徳哲学的提言部分のとりわけ3章は、続く4章を準備するかたちで、地震原因論部分の導入も兼ねている。また具体的な学説吟味が始まるのは6章からであり、3-5章を道徳哲学的提言部分から地震原因論部分への架橋と地震原因論の導入を段階的に行う部分とみなすこともできよう。『自然研究』において自然学と道徳哲学とはそれぞれ独立したコンテンツを形成しているのではなく、両者は相互に関連するかたちで記述されている⁷⁾。道徳哲学的提言部分と自然学的考察部分を相互に関連させて

ど)があるが、これらの双方を併せてまとめた分量で述べるものは、少なくとも現存文献中にはない。

- 5) これも言うまでもないことではあるが、本稿では古代の「自然学」ということばを近代的な「科学」ないしは「自然科学」の意味では使っていない。両者の間に若干の共通項を探ることは不可能ではないと思われるし、また現代におけるいわゆる“非科学的な風説”に対するものとしての科学的言説と似た機能・役割を自然学に見ることも可能であると思われるが、両者は別の概念である。
- 6) 古代自然学における自然現象に対する恐怖を取り除く姿勢についてはcf. Waldherr (1997), pp.47-48. (=ヴァルトヘル (2021)、pp.53-54)。
- 7) Stahl (1964), p.428.『自然研究』が単なる個別的な話題の集成ではないとするStahlの指摘の意義についてはcf. 角田 (2007)、pp.163f.

読むという Stahl 以来の解釈に基づいて第6巻を扱うのが本稿の立場である。このふたつの話題の重なり（本稿で扱う範囲について述べれば、地下構造についての記述が、学説記述であると同時に道德哲学的提言の補助にもなっており、その両方の読みが同時に成立すればこそ後述する「慣れ」を効果的に読者にもたらしうするというその重なり）が第6巻の叙述におけるひとつのレトリカルな特色であると言える。第6巻の構成が道德哲学的提言部分と自然学的考察部分を最終的にまとめあげるものになっていることについては、第6巻32章（最終章）の主題が自然学的学識による自然災害の恐怖の克服であるという Gross による端的な指摘⁸⁾から明らかである。セネカは自然災害をもたらす現象について、真実すなわち神々によらない⁹⁾自然「独自の原因がある」ことを知らないと恐ろしく、「理性(ratio)によって」自然を理解するべきであるという主張をし(6.3.1-2)、「恐れる原因は知らない(nescio) ことにあるのだから、恐れないために、知る(scio) ことは大いに価値のあることではないか」(6.3.4)とする¹⁰⁾。これら第6巻3章での記述が、4章以降の地震の原因について述べ自然学的考察を行う部分（以下、地震原因論部分と呼ぶ）を導入し、また地震原因論を経て最終32章で道德哲学的提言に立ち返り死を恐れるべきではないとする結論に集束する。この展開は自然学的考察がセネカの道德哲学的提言を補助する¹¹⁾ものとしても位置づけうることを示しており、とりわけ死への恐怖か

8) Gross (1989), pp.271-272.

9) 本稿で「神々」というとき、いわゆる一般的な神話的世界理解における人格神的神々（オリュンポスの神々のような）を指しており、ストア派などの哲学・自然学的議論で法則や自然やロゴスなどと同一視されるような神・神々を指さない。

10) 本稿では『自然研究』のテキストに Hine (1996) を用い、また邦訳には土屋訳(2006)を用いる。その他の古典文献の邦訳には、文献欄に掲載した訳者のものを用いている。また以下、『自然研究』6巻の箇所を示す際に作品名等を省き、「6.1.1」のように記す。

11) Gross (1989), pp.271-272. また、『自然研究』全体において自然学的記述が道德哲学的記述を支えることについては cf. Stahl (1964); Waldherr (1997), pp.69-81 (=ヴァルトヘル (2021), pp.84-100); 角田 (2007), pp.153-187.

らの解放をセネカの中心的主張であるとする¹²⁾とき、道徳哲学的提言と自然学的考察を併せて読むことの意義は明確である。この展開において注目されるのが、自然災害をもたらす現象における直接的原因としての神々の働きの否定(6.3.1)¹³⁾と、死もまた自然の法則であるという主張(6.32.12)¹⁴⁾である。自然現象を神々の意図から切り離し、死を自然の現象のひとつとするという、自然学的視座からの説得によってセネカは人々の恐怖を取り除こうとする。理性による自然理解の効能である。また、第6巻は地震原因論部分を通して個別の地震現象を「普通化」¹⁵⁾することにより恐怖の取り除きを行う構造を持つという指摘がWilliamsによってなされている。Williamsは第6巻が、カンパニア地震のような大災害を宇宙の機能における「普通」の現象であると示すという¹⁶⁾。災害をもたらす自然現象のこのような位置づけはルクレティウス『事物の本性について』での自然災害を宇宙のいち出来事に位置づけることで衝撃を軽減する仕方と共通してい

12) Gross (1989), p.271.

13) *ibid.*, p.247.

14) *ibid.*, p.271.

15) “Normalization,” Williams (2006). なお、古典古代の地震現象の取り扱いにおける「ふつう」(“normal”、あるいは“außergewöhnlich”(異常な)とあえて結び付けられる“normal”)概念、すなわち一見すると地震現象は異常(異例)なことに感じられるが、実際には普通(通常・平常)の現象・出来事であるという考え方はWaldherr (1997)に通底する視座のひとつであるが (cf. pp.10-11, n.4 (=ヴァルトヘル (2021), p.5)), Williamsの“normalization”では個別の事例(カンパニア地震)がその衝撃を和らげるために普通化される過程を追うという、より具体に即した概念運用がなされている。

16) Williams (2006), p.124. Williamsはさらに歩を進め、第6巻のこの叙述展開は地震現象それ自体だけではなく自然世界全体について諸現象を宇宙の機能の普通の側面とする見方を醸成するものである可能性に言及する。なお、TrinactyはWilliamsのnormalizationを受け、その別の仕方として、セネカがカンパニア地震の具体的な犠牲者(現実の死者)に言及していないことに注目し、その言及の欠如が実際の被害者のトラウマを癒すかたちでの災害の「記憶化(memorialization)」をもたらすという、興味深い指摘を行っている (Trinacty (2019), pp.101-102)。

る¹⁷⁾。セネカ『自然研究』第6巻においては、ひとつには地震原因論部分で他の地震事例を複数挙げることによってカンパニア地震をより大きな文脈の中に置くという仕方で行われる¹⁸⁾。いまひとつには、第6巻全体の構成の中で、「目(oculus)によって」(6.3.2)ではなく理性で自然を理解するべきであるとの主張を受けての¹⁹⁾、事例報告から理論的な理解へと視点を変え抽象的な議論を経ることで、個別具体的な事象を出発点にして宇宙全体の秩序を思考させる展開によって行われる²⁰⁾。Williamsによるこれらの分析はいずれも第6巻での恐怖に対する理性(ratio)の効能への言及に注目したものであり、自然学的考察(地震原因論)と道徳哲学的提言(地震災害および死を恐れるべきではないこと)との架橋をよく説明している。

本稿は第6巻における恐怖を取り除こうとするセネカの主張を見るにあたって、とりわけWilliamsの分析に示唆を受け、しかし理性そのものではなく、3章において理性の重要性を主張する際に言い添えられる「慣れ(familiaris)」(6.3.2)に注目したい。ここで、要約して上述した3章1-2節をあらためて引く。

次のことも、あらかじめ心得ておくことと有益だろう。すなわち、これらの災害は何一つ神々が引き起こすものではなく、神の怒りが空や大地を揺り動かすことはない、ということである。これらには独自の原因があるのであって、誰かに命令されて荒れ狂うわけではない。むしろ、

17) Williams (2006), pp.125-126. cf. Lucr. 6.647f.

18) Williams (2006), p.126.

19) *ibid.*, p.133.

20) *ibid.*, pp.137-146. これらに加えて、地震を人体に喩える手法も、宇宙をある種の生命体と考える見方との関連から、普通化に寄与しているとされる(*ibid.*, pp.134-137)。なお、人体と大地のアナロジーがセネカ以前から繰り返し使われていることについてはcf. Waldherr (1997), p.76 (=ヴァルトヘル (2021), p.93)。また、Waldherrはストラボンにも事例列挙や自然学的視座によっての不安の取り除きが見られることを指摘している(Waldherr (1997), pp.68-69 (=ヴァルトヘル (2021), pp.82-83))。

我々の身体と同様に、何らかの障害によってかき乱されるのであり、損害をもたらしているように見えるとき、実は損害をこうむっているのである。しかし、これらはすべて、真実を知らない我々にとってはとても恐ろしく、特にそれらが稀であることが恐怖を増大させる。ふだんから慣れ親しんでいることは起こっても大したことはないが、慣れていない出来事からはより大きな恐怖がもたらされる。しかし、なぜある出来事は、我々にとって不慣れなのか。その理由は、我々が理性ではなく目によって自然を理解しているからであり、自然が何をなすことができるかではなく、何をなしてきたかしか考えていないからである。それゆえ、我々はこれらの怠慢の咎によって、いわば前代未聞の出来事に脅かされるという罰を受けるのである。それらは前代未聞の出来事などではなく、ただ不慣れであるだけなのに。 (6.3.1-2)

災害が「稀 (rarus)」であることが恐怖を増大させる。「慣れ親しんでいる (familiaris)」出来事では恐怖の度合いが軽減される。日常的に「慣れていない (insolitus)」ことはより恐ろしい。そしてそのような事象に「不慣れ (insolitus)」なのは、「理性 (ratio)」ではなく目 (oculus) によって自然を理解している」ためである²¹⁾。それは「怠慢 (negregens)」であり、この怠慢ゆえに「前代未聞 (nouus) すなわち新しい初体験の恐怖を私たちは被ることになるが、それは実際には新しい (nouus) ものではなく「不慣れ (insolitus)」なものである²²⁾。続く箇所ではセネカは恐怖の原因を「知らない

21) ここから理性の効能に注目したのが上述の Williams (2006) であるが、そこではこの「慣れ」の問題が明示的に扱われてはいない。ただし他の地震事例についての言及 (Williams (2006), p.126) は「慣れ」に関わることであろう。

22) 7.1.1-5では現象の nouus や insolitus や rarus であることと solitus であることが (新奇・不慣れ・稀さと慣れとが)、目を向けるべき重要な現象であるかどうかの判断を曇らせてしまうことが指摘される。ただし7巻との比較検討は本稿の範囲を超える。なお、7巻では familiaris とその関連語は、雲と空気との「きわめて密接な関係 (familiarissimus)」(7.22.1)、哲学の「学派 (familia)」(7.32.2) という慣れとは関連しない2例のみ使われている。

(nescio) こと」(6.3.4)に置き、「知る(scio) こと」(6.3.4)の重要性を述べ、その記述がそのまま原因探求の重要性につながる。そのため、地震原因論部分を直接的に導入するために、「慣れ」の問題は「知ること」に吸収されている²³⁾ように見える。しかしながら最終32章の末尾でこの問題は死の受け入れにおける決定的な要素として再び現れる。考えることを重ねて死を「親しいもの(familiaris)」にせよ(6.32.12)と。では自然災害現象や死に「慣れ親しむ」には、つまりfamiliarisにしsolitusにするには、どのような過程が踏まれるのか。ひとつにはWilliamsの示す「普通化」のプロセスが大きく関わるであろう。本稿ではいまひとつの過程として、地震原因論部分での地下構造への繰り返しの言及が人々を否応なく地下に慣れさせて、また地下について抱いているイメージに影響を与えて、地下への恐怖を軽減しうることを指摘したい。これは、地震の自然学的考察という主題によってたとえ意図せずともそうなる(したがって自然学の成果を公表することそれ自体が多かれ少なかれそのような性質を持ちうる)、単純でより間接的な、しかし怠慢な精神であっても本巻に接する限り必ずさらされる、第6巻の機能の指摘である。

以下、まず山口(2016)を援用しつつ、『自然研究』第6巻の道德哲学的提言部分が人々の地割れ・裂け目と地下への恐怖に注目していること、セネカ以外の古典古代の文献に地震と地割れ・裂け目を関連させる表現が散見されること、そして地下は死者の世界であるという世界観が人々の感じる恐怖の背景にある可能性を確認する。次に、地震原因論部分で地下構造についての、とりわけその規模の大きさや多様さを示す地下世界描写とでも呼ぶべき記述を挙げ、死者の世界ではない地下が描かれていることを示す。豊かかつ多様な事例の提示が、読者に「慣れ」をもたらすという仕方で、恐怖を取り除く一助として機能しうるというのが本稿の主張である。

23) Inwood (2005), pp.180-181.

1. 地震時に発生する裂け目と地下への恐怖

「必要なのは、脅える人々を慰め、途方もない恐怖を取り除くことである」(6.1.4)。カンパニア地震を受けて恐怖する人々に対して、セネカはその恐怖を取り除く必要性を指摘し、人々への説得を行う。セネカによる説得は、地震による死は他の原因による死と性質が異ならないものであり²⁴⁾、死は何者にも平等に訪れる運命であるから²⁵⁾、したがって地震での死でもその他の死でも、死それ自体が恐れるべきものではなく受け入れるべきものである²⁶⁾、という理路を辿る。この説得によって死そのものへの恐怖を取り除こうとするのだが、32章で死を恐れない者のモデル的存在として〈命を軽視する者〉²⁷⁾を提示する際に、後述の通り、それが決して容易ではないことも示されている。そのうえで、「死を親しいものにしたまえ」と結ぶ²⁸⁾。

これと同時に行われているのが、先述した理性による現象理解に基づく、地震そのものへの恐怖の取り除きである。本稿で扱う裂け目・地割れと地下への恐怖は、地震現象そのものの恐ろしさを構成する大きなひとつである。「次のような類いの死に方をことさら恐れている人たちも少なくない。すなわち、地面の裂け目に (*in abruptum*) 自分の家もろとも落ちていき、生者の数から生きたまま引き去られる、という死に方である」(6.1.8)。人々が地震で発生する地割れに落ちるのを恐れていることに、セネカは目を向ける。

地割れと地下の空洞や地の底、また地下への沈降・落下²⁹⁾が、恐怖や地

24) cf. 山口 (2016)、pp.55-57。

25) cf. *ibid.*, pp.57-59. Waldherrはこの点を死の「不可避性と必然性」と端的にまとめる (Waldherr (1997), p.75 (=ヴァルトヘル (2021)、p.92))。

26) cf. 山口 (2016)、pp.58-59。

27) cf. *ibid.*, pp.54-55。

28) cf. *ibid.*, p.59。

29) cf. *ibid.*, pp.52-53. なお、6.2.4において、裂け目 (*hiatus*) と沈降 (*subsidio*)

震被害の描写と関連する。ここで1章および2章でのこれらの表現を列挙する³⁰⁾。

「ポンペイイーが地震によって崩壊した (consido : 崩れ落ちる・沈む)」(6.1.1)、「世界そのものが揺り動かされ、その最も堅固な部分がぐらつく (labo : 揺れ沈む)」(6.1.4)、「恐怖が深奥から (ab imo : 真底から) 生じ、地の底から (funditus) 引き出される」(6.1.4)、「大地そのものが崩壊を起こす (rimas agitat ; rima : 裂け目を、agito : 揺さぶり出す)」(6.1.5)、「ばらばらに離れ (discedo)」(6.1.5)、「この災害は、家や家族や個々の都市だけを飲み込む (haurio) のではなく、民族と地域をまるごと沈め (submergo)、あるいは廃墟で覆い (operio)、あるいは深淵に (in altam uoraginem ; altus : 深いところにある、uorago : 深い穴・裂け目・深淵) 埋没させ (condo)」(6.1.7)、「大きく口を開けた (dehisco : 割れる) 大地の巨大な空洞 (sinus) の中で息を引き取ろうとも」(6.1.9)、「あの深淵 (profundus : 深み) の中に運ばれていく」(6.1.9)、「一緒に落ちていく (concado) 多数の人々」(6.1.9)、「地震が引き裂く (scindo)」(6.1.11)、「それぞれのものがそれぞれの時に倒れる (cado : 落ちる・沈む)」(6.1.12)、「土地は結びつきが弱く (male cohaerere ; male : 悪く、cohaereo : 結びつく)、多くの原因によって分解し (soluo)」(6.1.15)、「電光や地震や地割れ (hiatus) を恐れる者」(6.2.4)、「大地が沈み (subsido) でもしない限り」(6.2.4)、「大地が引き裂かれ (diduco)、計り知れぬ災害を引き起こす巨大な力で破壊されて、私は底知れぬ深み (inmensam altitudinem ; inmensus : 計り知れない、altitudo : 深み・深さ) へと連れ去られる」(6.2.8)、「もし私が落ち (cado) ねばならぬとしたら、天から落ちる (cado) ことを望むだろう」(6.2.9)、「もし落ち (cado) ねばならぬとしたら、地球

は言い換え可能である (ibid., p.53)。

30) なお、邦訳文の意味のまま理解して差し支えない場合には表現の意味を補足していない。また、便宜上、2語以上で構成される表現は原文の語形を示したうえで原形を記し、前置詞句はそのまま、1語の場合には原形を記した。

が砕けた³¹⁾ときに落ち(cado)たい」(6.2.9)。

上記を整理すると、裂け目・分割に関係する表現として用いられているのはin abruptum、rimas agito、discedo、dehisco、scindo³²⁾、male cohaereo、soluo、hiatus、diduco、また関連して地下の空洞・裂け目を指すuorago、くぼみを指すsinuである。下方向への落下・沈降の表現として用いられているのはconsido、labo、submergo、concado、cado(5回)³³⁾、subsido、また関連して埋める・飲み込む表現としてhaurio、operio、condoである。深さや地の底の表現として用いられているのはab imo、funditus、altus、profundus、inmensus altitudoである。

cadoとconcadoなど関連語の使用はあるものの、全体として同じ語を1度しか用いない傾向があり、表現は多彩といえる。

次に示すように、地震と、地割れや地下に呑み込まれることとが関連して語られることから、また地下に死者の世界を想像できることから、これらの表現はひとまとまりの〈地震－地割れ－地下－恐ろしい〉というイメージの連関を形成しているといえる。

地震現象の描写と地震に際しての恐ろしさの表現に裂け目と地下に関連する表現が多用されるのは、ひとつには主に地下でのメカニズムを扱う地震原因論部分への準備でもあろう。同時に、古典古代の地震描写において地割れの発生と大地が町や人々を飲み込むという表現が散見されることから、ある程度一般的な表現であったためでもあろう。これは、人々が地震の際の恐ろしい出来事を漠然と想像したときに、地割れを思い浮かべやす

31) なお、この箇所「砕けた」にあたる語はconcutioで、直接的には激しい揺れを指す。

32) なお、scindoの関連語scissuraも揶揄として使われている。人を苦しめる痛み元として「爪の脇のちょっとした裂け目(scissura)」(6.2.5)。

33) ただしcadoの用例5回のうち6.2.9の4回は、どのような死に方でもかまわないことと死が万物に平等に訪れることを示すための、詩の引用とセネカによるその詩文のもじりに用いられている。

かった可能性を示唆する。また、人々が地割れと地下を恐れる背景には、冥界（死者の世界）が地下にあるという神話的世界理解が想定される。

地震時の地割れや地下へ飲み込まれることに言及する古典古代の例には次のようなものがある。

この種の表現の多用が目立つのがストラボンである。「たとえば、大地も裂け土地や家屋も呑みこまれるという出来事が、ブラ、ビゾネそのほかいくつもの場所で起り、それらは何れも地震によるものだったという話である」³⁴⁾のように、地震による地割れの発生に言及し、建造物被害を「家屋も呑みこまれる」と表現する。ルクレティウスでは地震は「深い大地を裂いて大きな裂け目を作」り³⁵⁾、「市中の人々は二重の恐怖におののく。すなわち上からは屋根が崩れ落ちはしないかと恐れ、下からは自然が大地の中の洞窟を突然破壊して、裂けた大地がその裂け目をひろびろとあけ、その廃墟でそこを満たそうとしてはいないかと心配する」³⁶⁾。「足の下から突然大地が遠のいて深淵に陥り、それに続いて全宇宙が残りなく崩れおち、世界は混乱の廃墟になりはしないか」という恐怖がある³⁷⁾。セネカの少し後のタキトウスは後17年アジア地震を「同じ年、アジアの一二の有名な町が、地震で壊滅する。〔中略〕空地に殺到するという、このような場合のきまった避難の仕方、役に立たなかった。大地が裂け、呑み込んだからである」³⁸⁾と描写する。以上は（ストラボンには先行記述者への言及が含まれ

34) Str. 1.3.10. 他に1.3.16（ポセイドニオスによるフェニキア地震の被害の記述として「ひとつの市が大地に呑みこまれ」）；1.3.17（デモクレスによる神話上のリュディア地震の描写として「いくつもの村も大地に呑みこまれ」）；1.3.18（前373年ヘリケの地震について「ブラとヘリケは、前者は大地が裂け、後者は津波が来て、共に姿を消した」）；1.3.19（地名ラガイの由来を地震による破断とする）；6.1.6（地名レギオンの由来を地震による破断とする）など。

35) Lucr. 6.583-585.

36) *ibid.*, 6.596-600.

37) *ibid.*, 6.603-607.

38) Tac. *Ann.* 2.47.

るとはいえ) いずれも紀元前後の例だが、遡ればプラトン『ティマイオス』ではアトランティス沈没の描写で地震と洪水の際に「戦士はすべて、一挙にして大地に呑み込まれ」と表現されている³⁹⁾。セネカより後代ではアルテミドロス『夢判断の書』の地震に関連する夢解釈の例に「地震や地割れ⁴⁰⁾や陥没の夢」「大地の崩落や陥没」があり⁴¹⁾、夢解釈の事例に挙げられる程度に地震と地割れの関係は一般性が高いことがうかがわれる。

また、地震原因の神話的理解に目を向ければ、地震を起こす主な神はポセイドン(ネプトゥヌス)であり、ポセイドンが起こす地震には「揺れ」だけではなく「割れ」のイメージも伴う⁴²⁾。セネカはカリステネスからの引用として次のように記している。「大地を揺り動かすこの力は、ネプトゥヌスに割り当てられている。初等教育を受けた者ならば誰でも、その神がホメーロスによってエノシクトーン⁴³⁾と呼ばれているのを知っている」(6.23.4)。地震を起こす神ポセイドンと地震の揺れと割れ目とを結びつける理解も一般性のあるものと思われる。前5世紀のヘロドトスによる次の記述は、この関係を当然のものとしているようにうかがわれる。

テッサリアの住民自身のいうところでは、ペネイオスの流れているかの峡谷は、神ポセイドンの作られたものであるというが、もっともな言い分である。というのは地震を起すのがポセイドンで、地震による亀裂をこの神の仕業であると信ずる者ならば、かの峡谷を見れば当然ポセイドンが作られたものであるというはずで、私の見るところ、か

39) Pl. Ti. 25c-d, esp. d.

40) なお、この箇所は原文の語順としては「地割れ」が「地震」に先行しており、興味深い。

41) Artem. 2.41.

42) cf. 山口(2014)。

43) 「大地を揺るがす者」。ポセイドンのエピセツトとして他にエンノシガイオス(同義)など。

の山間の亀裂は地震の結果生じたものに相違ないのである。⁴⁴⁾

そして、人々の神話的世界理解の中に、死者の世界が地下にあるという認識があったことはあらためて指摘するまでもないだろう。

すでにホメロス『イリアス』に次のような箇所がある。

折から上天では、人と神との父なる神が凄まじく雷を鳴らし、その下ではポセイダオンが涯しなき大地と山々のそそり立つ峰々を揺り動かす。泉多きイデの山の根も頂きもことごとく、トロイエの町もアカイア勢の船陣も揺れに揺れる。地底では死者の王アイドネウスも恐怖に襲われ、恐怖のあまり玉座から躍り上がって大声で叫んだが、これは大地を揺るがすポセイダオンが頭上の大地を切り裂いて、彼の館——神々すら忌み嫌う暗湿の恐るべき館が、人間と神々の目に晒されはせぬかと懸念したからであった。⁴⁵⁾

ポセイドン（ポセイダオン）の起こした地震によって、大地に裂け目が生じ地下にある死者の世界と地上とが繋がってしまわないかと、ハデス（アイドネウス）が心配している。地震の地割れによって地上と地下（冥界）が接続される可能性を考えると、人々にとって地震・地割れの恐ろしさは、このような世界観を共有しない現代の私たちにとってよりも、強く感じられるものであっただろう。

したがって、地震の際に大地が裂けるというイメージと、地下が死者の世界であるという世界観とが結びついて、人々の地震に対する恐怖の大きな部分を構成しているといえる。人々の恐怖を取り除くには、このイメージの連関を崩さねばならない。

44) Hdt. 7.129.

45) Il. 20.56-65.

この作業はもちろん理性に訴えて地震の原因を自然学的に説明すること
でなされる。しかし、理性に訴える正面からの説明だけで充分であろうか。

最終32章でセネカはその中心的主張である死を恐れないことを体現する
モデル的存在である〈命を軽視する者〉を提示する(6.32.4)。そこには
「しかし、命を軽視するのは、並みたいていのことではない(ingens: 尋
常ではない・ものすごい)」というひとことが添えられている。最終章に
至ってもこの態度は容易に達成されるものとはされていない。31章まで
になされた道徳哲学的説得(死を恐れるべきではないことを示す理屈)と
地震の原因の探求(理性による原因把握)が不十分なものであったという
表明ではないであろう。それでも、死の恐怖は容易には拭いがたい。であ
ればこそ、最終節で死を「親しいもの(familiaris)」にせよと結ばれる。
明示的に述べられる説得を補完するものとして「慣れ(familiaris)」るこ
との効能が意識されている。この「慣れ」の効能は死そのものについての
議論だけにあてはまるものではない(「慣れ」と「不慣れ」がフォーカス
されたのは、現象の恐ろしさに関する箇所においてであった)。以下、地
下と地割れについて、地震原因論部分に豊富な言及があることを示す。

2. 地震原因論部分における地下の描写

地震原因論部分では地下と裂け目や空洞への言及が多い。これは、自然
学的な地震原因論が地下で起きていることの説明に集中している⁴⁶⁾こと、
また地震を直接的にもたらす原因をなにに置くとしても地下に空間が発生
することもしくはあらかじめ地下に空間が存在することを想定することか
ら、当然である。地下構造への言及は第一には紹介される各学説の説明の
ために必要なものであり、また第二にはセネカ自身の説を述べるために有

46) ただし、地震の自然学的説明において、最初期のタレスの学説が紹介される
際には地下の構造に言及されない。タレスは水に浮いた大地が船のように揺
れることが地震であるとしており(6.6.1 = DK タレス断片 A15)。なお、大地が
水の上に浮いていることについてはcf. アリストテレス『天界について』294a
= DK タレス断片 A14)、地下構造は問題にならない。

用なものでもある⁴⁷⁾。そのうえで地下構造の、地下世界とでも呼ぶべき大規模で多様な描写が、学説説明という直接的な目的を離れた副次的な機能として、死者の世界ではない地下世界を人々に想像させ慣れさせることを指摘したい。以下に地下の世界の広がりを示す記述を叙述順に挙げる。

7章でタレスに次いで、否定されない最初の学説として紹介される水原因説⁴⁸⁾で早くも、そして最も長く、地下に多様な水があることが語られる。重要な箇所なのでほぼ省略せずに引用する⁴⁹⁾。

大地の内部にも、あらゆる性質と外観を持つ水がある。そこでも、ある水はものすごい勢いで流れ下って真っ逆さまに転がり落ちていくが、ある水はさほど勢いがなく、浅瀬でたゆたい、緩やかに静かに流れている。それなのに、水が巨大な貯水池に受け入れられて、多くの場所で動かずにとどまっていることを誰が否定できようか。あらゆる水が存在するのだから、そこに大量の水が存在することを長々と証明

47) 氣息を収められる空洞や通路のような穴が地下に存在することが、セネカが最大の原因とする氣息原因説の前提となる。したがって、セネカの自説が述べられる前に地下の空洞の存在が十分に示されている必要がある。それにとどまらず、セネカの説の具体的な結論のひとつである、地震の揺れの範囲はその地下にある空洞の広さと一致する(6.25.4)という見解の前提として、ある程度広大な地下空洞があることが予め了解されていることはさらに重要である。加えて、セネカは地下に大量の氣息が存在することの説明を、宇宙・天全体の運行が大地からの氣息を糧としており、そのためには大地に大量の氣息がなくてはならず(6.16.2-3)、「したがって、多量の氣息が大地の内部に隠れていて、広大な空氣が地下の空洞になった空間を占領していることは疑いない」(6.16.4)という理屈で行う。この、大量の放出から供給源の潤沢さを想定するという仕方は、後述する7-8章で水について示される、地上の河川の水の供給源として地下に大量の水の存在を想定するのと同じ仕方である。7-8章で地下の水の存在の理屈を認めたのであれば、同じ理屈で地下に大量の氣息が存在することを認めなければならない。すなわち、先行する地下世界描写部分が論理の用い方という面でもセネカの説を支えている。

48) なお、本稿は各学説の提唱者には注目しない。本稿の関心は学説間の関係ではなく、各所で行われる地下描写にあるためである。

49) 「慣れ」の効果を示すには、地下がどのようなものであるかの記述の、いうなれば「しつこさ」を見て取ることも有益であろうという観点からも、本稿ではできる限り引用を連ねる。

する必要はない。というのも、貯えられた大量の水から注ぎだすのであれば、大地はこれほど多くの川を作り出すことはできないだろうから。

これが事実だとすれば、時には地下で河川が増水し、元の川岸をあとにして、行く手を阻むものに激しく突進することは必然である。そうすれば、川が衝撃を与え、水量が減るまで攻撃し続けた個所に変動が起こるだろう。氾濫する川が地下のある地域をすっかり侵食し、そうしてある程度の土塊を引きずり下ろすので、それが滑り落ちる時に、上に乗っているものを震動させるということが起こりうる。

さて、実際、大地の中に隠された場所に広大な海の入江があることを信じない人は、目 (oculus) にあまりに多くのことを委ね、目を越えて心をさらに先へ導くことを知らないのである。というのも、地下の隠された場所にもある種の海岸があり、秘密の入口から地中に入り込んだ海があることを、禁じたり妨げたりするものを私は知らないからである。そこでも海は地上と同じくらい広い場所を、あるいはおそらくそれよりもっと広い場所を占めているだろう。〔中略〕

このような水が地下で揺れ動いたり、大地のあらゆる隙間やあらゆる空気が作り出す風によって突き動かされたりすることに、何の妨げがあろうか。それゆえ、通常よりも大きな嵐が生じれば、大地の一部を突き動かして、より激しく揺り動かすこともできる。実際、我々の地上でも、海から遠く離れていた多くの場所までが、突然近づいてきた海に打たれたり、海を遠望する場所にあった別荘が、それまでははるか遠くに聞こえていた波に襲われたりしたことがある。地下でも、地底の大海は退いたり再び水位を上げたりすることがありうる。いずれも、その上に位置する大地の動きをとみなわずには起こらない。

(6.7.3-6)

地下にはあらゆる種類の水が大量にあり、地下河川は緩やかにも激しくも

流れ、湖も海も入江もある。洪水も、嵐も、潮の干満（あるいは高潮や津波か）も発生する。河川の水の増減や海の水位への言及から、水に満たされていない空間の存在も想定される。あるいはその空間は、嵐への言及から、空のような広大なものである。地上に似た、壮大な世界である。地震原因論部分のほぼ冒頭に置かれたこのような描写は衝撃的でさえあるかもしれない。そしてこのような地下世界こそ、6.3.2を受けて再びここで述べられるように、「目 (oculus) (6.7.5)」ではなく理性によって理解されなければならない⁵⁰⁾。

引用部冒頭 (6.7.3) では地下に大量の水が存在することは「長々と証明する必要はない」とされ、ほとんど自明のこととして提示されている。続く8章ではセネカがこれを補足するように肯定する。

地下の河川や隠れた海があることを信じるべきかどうか、君が長いこと躊躇するとは少しも思わない。というのも、水の源が地下に閉じ込められているのでなければ、地上の川はどこから我々のもとにやって来るのだろうか。 (6.8.1)

それがナイルの水源であれ、支流であれ、その場で生じた水であれ、以前に地中に吸収された水が再び流れ出たのであれ、何であれ、それは地下の大きな湖から昇ってきたものだと君は信じないのかね。というのも、地中にはいくつもの場所に分散された水もあれば、それほど勢いで噴き出すことができるほど一つに集められた水もあることは、当然だからである。 (6.8.5)

地上の川の水源を地下に求めるのであれば、大河の水量をまかなうのに充

50) Inwood (2005), p.182. また、この7章と続く8章での補足を併せて、セネカが水原因説そのものよりもむしろ地下の大量の水の存在を肯定的に示していることを Inwood は指摘する。

分な水が地下に存在しなければならない。このような理屈から、地下には大量の水が(したがって広大な空間が)ある。それは、「当然」のことであって、理性によって世界を把握するのであれば、素直に受け入れられなければならない。

さて、地下の空間で嵐が発生するのであれば、雲や雷も発生する。続く9章では次のように述べられる。「より深いところにある氣息が、濃密で凝集した雲になった空気を、我々のもとでもよく雲が破碎されるのと同じ力で破裂させる。そして、この雲の衝突と押し出された空氣の突進から火が発生する」(6.9.1)。この「火 (ignis)」は稲妻のような現象を指す。他方、炎のような燃える火 (ignis) も地下にはある。「他の人たちが火に原因があるとみなしているのは、そのような理由からではなく、(地下の) 多くの場所で隠れた火が燃えていて、何であれ隣接するものを消耗するからだという。これらの個所がいつかすっかり焼き尽くされて崩壊した時には、それに続いて、下で支えていたものが取り払われて、上に乗っていた部分が滑り落ちる運動が生じ、ついには崩壊する」(6.9.2)。「(地下の) 多くの場所で火が燃え立つと、必然的に出口のない膨大な蒸気が巻き起こる」(6.11.1)⁵¹⁾。

51) なお、11章はGertzによって9章の直後に移すこと(10章との入れ替え)が提案されている(Gertz (1884), p.361)。9章で火原因説が紹介された後に10章で大地それ自体を原因とする説が置かれ、11章で火原因説に戻ることを考慮すれば、9章と11章を連続させた方が「つながりがよい」(土屋(2006)、p.29 n.1 ad 6.11.1)かもしれない。ただし、9章前半の火(雷火)原因説は、引用した通り、火の発生をもたらすものとして氣息を置いている。また、10章の説は主たる原因ではないものとして火に言及している。「大地のある部分を、水分が溶解したり、火が焼き尽くしたり、氣息が激しい力で打ち砕いたりした場合には (si aut umor resolverit aut ignis exederit aut spiritus uiolentia excusserit)、その部分が陥没する。しかし、これらのことが起こらなくても、大地の何らかの部分が消失したり剥ぎ取られたりする原因には事欠かない」(6.10.1)。(ところでここでは水、火、氣息の順で述べており、この順番は6巻の叙述順〈6-8章：水、9-11章：火、12章以降：氣息〉に対応している)。そして11章は、原因を火に帰する10章まで(あるいは9章まで)とは別の仕方(sed aliter)での説明として、火が燃えて熱し(feruo)で蒸気(uapor)を発生させ、その蒸気が氣息(spiritus)に作用して揺れをもたらすとする。つまり11章の説は大元の原因は火に置いているものの、揺れを直接に起こすもの

12章からは主に氣息原因説が述べられるため、地下描写も空洞あるいは通路への言及が増える。地下には多くの空洞があり、また細い穴なども通じていることが繰り返し述べられる。「風が地中の空洞へ運ばれる。〔中略〕その空気は場所を求めてあらゆる隘路を押し開き、自分を阻む障害物を粉碎しようとする」(6.12.1-2)。「大地が揺り動かされる前には唸り声がよく聞こえるが、それは風が地下の奥で騒ぐことによって起こる」(6.13.5)。「すべての大地の身体全体には、血液の代わりに務める水にとっても、息と言うほかはない風にとっても、通路が走っている」(6.14.1)。地下の空洞や通路の中を風が行き来している。

そしてそのような穴は地表にも通じている。「大地は多くの個所に穴が開いている。大地には、その始まりの時から、あたかも呼吸孔であるかのように持っていた、あの最初の出入口があるだけでなく、偶然の出来事が多くの穴を付け加えた」(6.15.1)。この穴は地下と地上を繋ぐ穴でもある。大地が裂けなくても、地下と地上はすでに接続されている。

20章では複数原因説へと話題が移り、空洞と共に地下での水の動きが再び語られる。「大地のある部分は中空になっていて、そこには大量の水が流れ込んでいる」(6.20.1)。

水は一個所に集められて、みずからを保持できなくなると、ある方向へ傾き、最初はその重みによって、次にはその勢いによって道を開く。すなわち、長い間閉じ込められていた水は、下り坂に沿ってでなけれ

としては蒸気と氣息に注目しており、12章以降に述べられる氣息原因説の直前に置かれることの接続の良さも十分に認められる。〈6-8章：水原因諸説、9章：氣息に起因する火を揺れの直接の原因とする説と火のみを原因とする説、10章：水・火・氣息原因説を否定しないものの地を主たる原因とする複数原因説、11章：火を原因としつつ蒸気・氣息の役割を重視する説、12章以降：氣息原因説〉と見るときに、9-11章は氣息にも触れながら揺れの直接的原因としては火や地を置く説から、火にも触れながら揺れの直接的原因としては氣息を置く説へと移り変わっている。このように見れば、11章の位置はとりたてて不自然なものではなく、入れ替えの強い必要性は認められない。

ば外へ出ていくことができないし、ほどほどの勢いでまっすぐに落ちることもできず、それが流れ落ちる時には、通過する途中にあるものや向かっていく先にあるものを震動させずにはおかぬからである。

(6.20.2)

水は大地のある部分を洗い流したり浸蝕したりした場合には、大地を揺り動かすことができる。大地の部分は、こうして弱くなると、無傷の時には耐えていたものを支えきれなくなるからである。氣息の圧迫も、大地を揺り動かすことができる。すなわち、おそらく（地下にある）空氣が外部から侵入してくる他の空氣によって駆り立てられ、おそらく大地のある部分が突然に陥没して揺さぶられ、そこから震動を得るだろう。おそらく、大地のある部分は、いわば何か円柱や支柱のようなものによって支えられており、それらが損傷したり外れたりするとき、上に置かれていた重量物が震動するだろう。おそらく、氣息の熱い本性が火に転化して、電光のように、行く手を阻むものを破壊しながら運ばれていくだろう。おそらく、沼沢地や溜まった水を、何らかの風が吹いて突き動かし、そこからその打撃が大地を震わせるか、あるいは、氣息の震動がそれ自体の運動によって増大し、みずからを駆り立てて、地底から地表まで運ばれていくのだろう。

(6.20.6-7)

上記 6.20.6-7 はエピクロスによる複数原因説部分で、これまでに述べられてきた地下での様々な原因の働きや動きをまとめなおしているかのようにも読むことができるかもしれない。

さらに、22 章でも地下の空間が、地上になぞらえるかたちで描写される。

岩が山腹から引き離されて落ちてきたとき、近くにあった建物がその

震動のせいで崩壊したという。これと同じことが、地下でも起こりうる。上から覆いかぶさる岸壁の一部が分離して、巨大な重量と大音響とともに下に横たわる空洞の中へ落下するような場合である。それは、岩の重量がより大きいのか、落下していく場所がより高い場合には、それだけいっそう激しいものになる。このようにして、中空になった窪みの屋根全体が激震することになる。(6.22.2)

地下の空洞での岩塊の崩落が述べられる。ここでも広い空間の存在が想像されると共に、地上での例は落下の震動で建物が倒壊するほどの巨大な岩であるため、地下で落下する岩塊もおのずと巨大なものが想像される。

おわりに

以上のように、『自然研究』6巻の地震原因論部分では、詳細かつ繰り返し、また地上に勝るとも劣らない規模を想像させるように、具体性を伴って、地下の描写が行われている。このような地下の自然学的想定は、7-8章で述べられたように、論理的に導き出されるものであって、唐突で荒唐無稽なものではない。その地下には大小さまざまな空洞があり、そこには水や空気が流れ、火が燃え、海や嵐さえもある。神々の力の直接的介入を受けずにおのずと成立している地下世界である。

セネカは6巻の中で地下が死者の世界ではないことを明言してはいない。そもそも自然災害は神々が起こすものではなく(6.3.1)、自然現象は自然のメカニズムの中で起きているのだから、地下が神々によって死者が管理される冥界ではないことを改めて主張する論理的必要性はなかったであろう。そのうえで、神々や死者がおらず自然独自のメカニズムで動く地下世界の記述に何度も触れる読者は、自然学が当然の前提とする地下のありかた(あるいはそのような地下があるという世界観)にいつの間にかそうならざるをえないという仕方で慣れる(*familiaris*になる)ことは充分に期待される。それは、6巻で展開される論理的主張とは別の仕方で、地下

そのものや地下と繋がる地割れの恐ろしさを軽減する。「繰り返し」そして「よく考察を重ねて」「死を親しいものにする」(6.32.12)のと(より限定的かつ間接的であったとしても)似た仕方で、6巻を読む者は自然学的地下を親しいものとする。

むろんその地下世界の記述は、第一義的には地震を引き起こす地下でのメカニズムの自然学的説明に必要であるから提示されているものである。本稿が指摘する地下への「慣れ」の効果は、あくまでも副次的なものである。だが、命を軽視するのが容易なことではない(*ingens*なことである)のとおそらく同様に、自然学的世界観に納得して恐れなくなるのも容易なことではないかもしれない。であればこそ、知るだけでなく、慣れることの意義も大きい。6巻の読者として(直接的に宛てられているルキリウスではなく)地震に脅える人々を想定したとき、たとえば自然学的嗜みを持たない読者についても多少なりとも恐怖を軽減させることが期待できる慣れをもたらす機能は、現実の発災の直後に書かれた本巻にとって、重要な側面である。

参考文献

- アリストテレス(山田道夫訳)(2013)「天界について」『(新版)アリストテレス全集(5)』岩波書店。
- .(三浦要訳)(2015)「気象論」『(新版)アリストテレス全集(6)』岩波書店。
- アルテミドロス(城江良和訳)(1994)『夢判断の書』国文社。
- 角田幸彦(2007)『ローマ帝政の哲人セネカの世界——哲学・政治・悲劇——』文化書房博文社。
- 自然哲学者断片(内山勝利・他訳)(1997-1998)『ソクラテス以前哲学者断片集(1-6、別冊1)』岩波書店。
- .(日下部吉信訳)(2000-2001)『初期ギリシア自然哲学者断片集(1-3)』筑摩書房。

ストラボン（飯尾邦人訳）（1994）『ギリシア・ローマ世界地誌（1・2）』龍溪書舎。

セネカ（土屋陸廣訳）（2006）『自然研究』『セネカ哲学全集（3・4）』岩波書店。

タキトウス（国原吉之助訳）（1981）『年代記（上・下）』岩波書店。

プラトン（種山恭子訳）（1975）『ティマイオス——自然について——』『プラトン全集12』岩波書店。

ヘロドトス（松平千秋訳）（1971-1972）『歴史（上・中・下）』岩波書店。

ホメロス（松平千秋訳）（1992）『イリアス（上・下）』岩波書店。

山口京一郎（2014）『地を割るポセイドン——『エイコネス』II.14, 16, 17——』『ICU比較文化』46、pp.23-46。

——.（2016）『セネカ『自然研究』6巻における地震による地裂現象と関連表現の役割——導入部と最終章を中心に——』『西洋古典学研究』64、pp.50-61。

ルクレティウス（泉井久之助・岩田義一・藤沢令夫訳）（1965）『事物の本性について』『ウェルギリウス ルクレティウス（世界古典文学全集21）』筑摩書房。

Gertz, Martin-Clarence, (1884), "Emandationes Annaeanae," in *Mélanges Graux: Recueil de travaux d'érudition classique : dédié à la mémoire de Charles Graux*, Paris: E. Thorin, pp.353-379 [web. <https://books.google.co.jp/books?id=9IAOAAAAQAAJ> (accessed on Aug. 27, 2023)].

Giussani, Carlo, (1980), *T. Lucreti Cari de Rerum Natura Libri Sex*, (2 vols.), New York and London: Garland Publishing.

Gross, Nikolaus, (1989), *Senecas Naturales Questiones: Komposition, naturphilosophische Aussagen und ihre Quellen*, (Palingengenesia, 27), Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Hine, Harry M., (1984), "The Date of the Campanian Earthquake A.D. 62 or A.D. 63, or both?," in *L'Antiquité Classique* 53, pp.266-269.

- . (1996), *L. Annaei Senecae Naturalium Questionum Libros*, (Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana), Stuttgart and Leipzig: B. G. Teubner.
- Inwood, Brad, (2005), *Reading Seneca: Stoic Philosophy at Rome*, Oxford: Clarendon Press.
- Pack, Roger A., (1963), *Artemidori Daldiani Onirocriticon libri V*, (Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana), Leipzig: B. G. Teubner.
- Stahl, Gisela, (1964), “Die “Naturales Quaestiones” Senecas: Ein Beitrag zum Spiritualisierungsprozeß der römischen Stoa,” in *Hermes* 92(4), pp.425-454.
- Trinacty, Christopher, (2019), “Fear and Healing: Seneca, Caecilius Iucundus, and the Campanian Earthquake of 62/63 CE,” in *Greece & Rome* 66(1), pp.93-112.
- Waldherr, Gerhard H., (1997), *Erdbeben: Das Aussergewöhnliche Normale: Zur Rezeption seismischer Aktivitäten in literarischen Quellen vom 4. Jahrhundert v. Chr. bis zum 4. Jahrhundert n. Chr.*, (Geographica Historica, 9), Stuttgart: Franz Steiner Verlag GmbH (ヴァルトヘル、ゲルハルト H. (内田次信・竹下哲文・上月翔太訳) (2021)『西洋古代の地震』京都大学学術出版会).
- Williams, Gareth D., (2006), “Greco-Roman Seismology and Seneca on Earthquakes in *Natural Questions* 6,” in *The Journal of Roman Studies* 96, pp.124-146.

要旨

セネカ『自然研究』第6巻は現実のカンパニア地震と自然学の探求対象としての地震とを結びつけ、地震の原因についての理論を扱いつつ、死を恐れるべきではないという提言を行う一書である。

道徳哲学的提言を提示する部分と自然学的考察を行う部分（地震原因論部分）とを相互に関連するものとして見る解釈の中で、とりわけ6巻3章の理性の働きに注目する Williams に示唆を受け、本稿は同個所の「慣れ (familiaris)」の効能に注目する。3章では、不慣れなことは恐ろしく、慣れている出来事では恐怖の度合いが軽減されると述べられる。また、32章では、死そのものの受け入れについて、死を「親しいもの (familiaris)」にせよとも述べられる。

セネカはカンパニア地震を受けて地震に脅える人々の恐怖を取り除く必要性を指摘する。人々が地震について感じる恐怖の対象のおおきなひとつが、地割れ・裂け目の発生と、そこに落下することである。本稿では、セネカが1-2章において人々の地割れ・裂け目と地下への恐怖に注目していること、セネカ以外の古典古代の文献に地震と地割れ・裂け目を関連させる表現が散見されること、そして地下は死者の世界であるという世界観が人々の感じる恐怖の背景にある可能性を確認する。そのうえで地震原因論部分では死者の世界ではない自然学的に想定される地下が豊富に描かれていることを示す。この地下は、神々の力によらず、また死者もおらず、おのずと成立している。大小さまざまな空洞があり、水や空気が流れ、火が燃え、海や嵐さえもある。詳細かつ繰り返し、また地上に勝るとも劣らない規模を想像させるように、具体性を伴って、地下の描写が行われている。その繰り返しの描写に触れることによって、6巻で展開される論理的主張とは別の仕方で、地下そのものや地下と繋がる地割れに慣れ、その恐ろしさを軽減する効果が期待される。

6巻の読者として（直接的に宛てられているルキリウスではなく）地震

に脅える人々を想定したとき、たとえば自然学的嗜みを持たない読者についても多少なりとも恐怖を軽減させることが期待できる慣れをもたらす機能は、現実の発災の直後に書かれた本巻にとって、重要な側面である。